

第3節 理系大学院の充実

入学定員35名でのスタートであった。入学式は4月28日に行われた。つづいて1983年度には、理科教育（10）、社会科教育（10）、保健体育（5）の3専攻の設置が認められ、計9専攻となった。さらに1987年度には技術教育専攻（5）が、91年には家政教育専攻（5）が設置された。

第3節 理系大学院の充実

第1項 薬学研究科総合薬品科学専攻（博士課程）の設置

1979年4月1日、既設の薬学研究科薬学専攻および製薬化学専攻（いずれも修士課程）を改組し、前期課程（入学定員29名）、後期課程（同12名）からなる薬学研究科総合薬品科学専攻（博士課程）が設置された。これにともなって薬学部では、13講座を統合して4大講座（衛生薬学、医薬品素材学、薬効・安全科学、医療薬剤学）に編成し直し、同時に2学科制（薬学科、製薬化学科）を1学科制（総合薬品科学科）に改組した。

『千葉大学学報』508号に記載の、博士課程設置の事由は以下のとおりである。

近年、人を中心とした医学・薬学それぞれの進歩にともない、学問領域が細分化し、薬学研究と医療との間の空白領域が拡大している。薬学の研究分野を拡大し医学との境界領域を埋め、広い視野に立つ高度の薬学研究者を養成することが強く要望されている。

この要望に応えるため、医と薬との共同研究体として独自の発展を続けてきている生物活性研究所および医学部附属病院薬剤部との連合を図り、また同時に医学部の基礎および臨床医学系各部門の協力を得て、医学との境界領域に広い視野をもつ高度の研究能力を有する者の養成を行おうとするものである。

第2項 看護学研究科（修士課程）の設置

1979年4月1日、看護学研究科（修士課程）が設置された。専攻は看護学の1専攻、入学定員は15名、修了者には保健学修士（1981年に看護学修士と改正）の学位が与えられる。設置事由を記した文を、『千葉大学学報』508号から引用する。

看護学部は、看護専門領域がかかえている諸問題を、解決の方向へ進展させ得

第2章 大学院の拡充と人文・社会系学部の充実

る人材の育成を目的として創設され、将来、修士課程をもつ学部として発足した。したがって、本学部の目的を達成するためには、独自の教育と研究を展開する基本理念およびその実現方策が、まず問われなければならない。そこで、教育と研究の一貫性を図る学部として、当初より講座制を採用し、統合したカリキュラムの作成に努力を傾けてきた。

学部発足以来、看護学に関する教育と研究について様々な角度から検討を重ねた結果、一般教養課程、専門課程の一貫性を主軸とすること、看護学を人間科学の一専門分野として位置づけることおよび人間に関する諸科学を看護の立場から系統立てるという結論に達した。

学部教育では、広い一般教養と看護の基礎科学および実践学の知識の習得を目標としており、この目標を達成した後、看護学の各領域における専門的知識の習得と、それに必要な研究能力を育成発展させるためには、より高度な教育が必要である。すなわち、看護学の確立と発展に寄与できる人材の育成、基礎看護学および応用看護学各領域における教育者、研究者および指導者を育成するためには、高度な専門職業教育および研究を行う大学院を設置する必要があり、設置されたものである。

第3項 工学研究科・園芸学研究科（修士課程）の拡充

(1) 工学研究科建築工学専攻（修士課程）の設置

1983年4月1日、建築学専攻から建築構造系を分離独立させて、建築工学専攻（入学定員7名）が設置された。これにともない既設の建築学専攻の入学定員は、17名から10名となった。

(2) 園芸学研究科園芸経済学専攻（修士課程）の設置

1983年4月1日、既設の農業生産管理学専攻の改組により発足し、入学定員は10名であった。

第4項 自然科学研究科（博士後期課程）創設の準備体制

(1) 工学研究科生産科学専攻（博士課程）の設置

1986年4月1日、千葉大学総合大学院構想にもとづき、将来は自然科学研究科の一

第4節 自然科学研究科（博士後期課程）の創設

専攻となることを予定して設置された。工業生産および生物生産それぞれ固有の分野の深化はもとより、両者の融合を意図した新しいタイプの教育・研究組織である。教員組織には主として工学部と園芸学部の教員が参加し、総人数は82名（非常勤5名を含む）。1講座は教授6、助教授3、助手1の計10名からなる大講座制で、全体は、生産工学、システム工学、計測情報科学、生物生産基礎科学、生物工学、生物資源生産学の6大講座で構成され、入学定員は18名であった。

(2) 理学研究科数理・物質科学専攻（博士課程）の設置

1987年4月1日、千葉大学総合大学院構想にもとづき、将来は自然科学研究科の一専攻となることを予定して設置された。教員組織には理学部、教育学部、工学部、教養部の74名の教員が参加し、非常勤9名を加えて総数83名。教育・研究組織は、従来の学部や研究科の組織編成にとらわれない新たな観点による大講座制をとり、数理科学、物質基礎科学、物質構造分化科学、物質機能科学、像形成科学の5大講座で構成され、入学定員は15名であった。

第4節 自然科学研究科（博士後期課程）の創設

1980年度から1983年度にかけて、1979年作成の「千葉大学総合大学院構想」（第1章第5節第4項で既述）にもとづき環境科学系、生産科学系、理論・物性科学系の3研究科の概算要求（年度により名称変更、優先順位はあるが、基本は同じである）が行われたが、文部省の反応は鈍かった。「教員組織等が充実した大学には」大学院の設置、研究科・専攻の増設等、引き続きその整備充実に力を注いでいるという文部省の建前であったが、当時の行革ムードもあり、また諮問機関である大学院問題懇談会（座長：大泉孝上智大学名誉教授）の「大学院の改善・充実について」が1983年3月、修士課程はともかく「博士課程の拡充については慎重な扱いが必要」と述べていたからである。

そこで1982年8月香月学長の跡を襲った井出源四郎は、1983年3月今後の具体案の検討を評議会内第4小委員会で行うこととする一方、3研究科構想を1つにまとめ自然科学総合研究科（仮称）とするよう方針を変更した。自然科学系総合大学院の具体案は、第4小委員会のもとにつくられたワーキンググループにより4月から6月にかけて検討され、数理・物質科学、生産科学、像科学、生物資源科学、環境科学の5専